

4-11				
主題	認知症への理解があり、皆で支え合える地域にするための 世代や分野を越えて繋がる取り組み			
副題	ユニバーサルカフェや見守り隊等の実践			
キーワード 1	世代や分野を越える	キーワード 2	支え合える地域	研究(実践)期間 48ヶ月

法人名・事業所名	社福) マザアス 日野市地域包括支援センター多摩川苑			
発表者(職種)	浅見ゆかり(主任介護支援専門員)、坂本光徳(社会福祉士)			
共同研究(実践)者	福田夏織(主任介護支援専門員)、小野寺由香理(看護師)			

電話	042-582-1707	FAX	042-582-1730
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	社福) マザアスは東久留米、日野、新宿に拠点を持つ高齢者福祉総合施設です。当センターは、平成 21 年に日野市にある 9 包括の 1 つとして委託を受け開設しました。現在の職員体制は、相談員 5 名、プランナー 1 名の計 6 名。認知症地域支援推進員と生活支援コーディネーターが配置されていますが、相談業務と兼務です。			
-------	--	--	--	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

取り組みを始めた当時の当センターの担当地域の人口比率は、高齢化率 18.0%、14 歳以下 15.6%と、全国値に比べ高齢化率が低く若年層が多いという特徴があった。そのためか、認知症をはじめとした高齢者の抱えている問題に対する関心がうすく、理解が乏しいという現状であった。これは、当センターが認知症サポーター養成講座や地域での勉強会やイベントを開催しても、高齢者やそのご家族世代の参加がほとんどだといった実態からも裏付けられる。そのため、高齢者の見守り等の支援につながりにくいという課題があった。また、地域包括支援センターの役割も地域に浸透していないという状況があった。若年層が多いという背景には、区画整理が進み若い子育て世代の転入が増えている事が要因の一つと考えられる。それに反して、当センターの担当地域は数百年に渡り代々日野市に住んでいる方も多く、新旧住民の交流が少ない事、自治会への加入率が低いという特徴もあった(平成 27 年度 日野市地域協働課による調査より)。調査からは「高齢者の見守り」を地域の優先課題と考えながらも、解決への取り組みが進まない状況であり、地域住民が「多世代が支え合う」ことが大事だと考えていることが読み取れた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

取り組みの実践前の状況と課題を踏まえ、目指す姿として「認知症の理解があり、皆で支えあえる地域にする」とした。そのために、高齢福祉分野だけでなく、様々な「世代」や「分野」を越えた理解者や支え手を増やし、地域でつながる仕組みが不可欠だと考えた。そのための具体策として「認知症の理解促進」、「ネットワークづくり」、「地域住民の活動促進」に取り組むこととした。これらの取り組みは相互に影響しあい、相乗効果を上げられると期待できる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ①多摩川苑だよりの発行と配布
- ②「認知症サポーター養成講座」「認知症サポーターステップアップ講座」開催
- ③「たまカフェ」「夜のたまカフェ」開催
- ④「わんわん見守り隊」「たまっと見守り隊」の発足
- ⑤「地域課題解決のための地域ケア会議」開催

《4. 取り組みの結果》

4年という時間をかけ「知る」、「理解する」、「支え手になる」、そして「つながる」ことを目的に取り組みを実施。当初はまずセンターの役割を知ってもらうことを目的に「多摩川苑だより」を発行。自治会をはじめ、各種商店、医療機関、公共機関等に配布。「認知症サポーター養成講座」、上級講座となる「ステップアップ講座」を開催し、認知症に対する正しい理解の普及を進めた。住民による高齢者の見守りボランティアを募るべく、犬の散歩中に見守りを行う「わんわん見守り隊」を発足。後に犬を飼っていない方のボランティアとして「たまっと見守り隊」も結成。両隊員の合計は約 50 名。日野市長も加わっている。発足後にはボランティアの方が「何か変」という気づきの連絡をセンターにし、これまでに数名の方を救出したこともある。同時に高齢福祉分野に限らず、児童、障害分野、そして多世代交流できるユニバーサルカフェとして「たまカフェ」を開催。開催時には地域にある「スターバックスコーヒー」の協力を得ている。平成 28 年度から毎年 1 回開催し、昨年度は 90 名以上の住民が参加。また、防災をはじめとした地域課題解決型カフェとして「夜のたまカフェ」も定期開催し、地域課題を検討する機会を作っている。

これらの取り組みを行うまでセンターの役割を知らなかった方やセンターとのつながりのなかった方も多くいたが、これらの活動を通じて、徐々に新しいつながりが出来始めている。また、見守り隊の隊員同士やカフェ参加者同士など住民同士の新たな横のつながりも出来ている。

《5. 考察、まとめ》

さまざまな活動を行ってきたことで高齢福祉分野に限らず、さまざまな分野、世代が認知症の方への理解を深め住民自らが支援できる地域になってきた。しかし、当初の目的の「子育て世代」との交流は少なく、「支え手」は 50 歳以上の住民がほとんどである。今後は、学校、学童、子ども会などに働きかけ、子どもを通じて親にも関心をもってもらえるように新たな取り組みを企画中である。

今後もこれまでの活動を継続し、同時に新たな取り組みも行い、地域に住む方々が高齢者のことを理解し、住民同士の支え合いが活発な地域の実現を目指していきたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(関係者)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

平成 27 年度 日野市役所地域協働課 地域懇談会資料

平成 28 年度 認知症地域支援推進員研修「矢巾町 認知症支援の取り組み」

平成 29 年度 認知症ケアセミナー研修資料

《8. 提案と発信》

地域包括ケア実現のために世代や分野を越えた理解と協力は不可欠である。今後もセンターでは世代や分野を越えた住民同士のつながりのきっかけ作りを行っていく必要がある。